

あとがき

本書は、「はしがき」にもありました通り、昨年（昭和五十年十月）に行なわれた同志社大学Ⅱ部
労学アッセンブリー・アワーでの講演をまとめたものです。

この労学アッセンブリー・アワー（以下A・Hと略す）は、二年半程以前、それまでの形を破り、
大学当局から学生側が実行権を奪い取ったものです。同時に、学外と共に「場」を拡く開放してい
かねばならぬとの意味を込めて労学・A・Hという呼称に改め、第一回は「戦後教育を告発する」と
いうテーマで、現場教師を講師に迎え、今回と同じく三日間連続して開かれたのです。

その時、実行委だった友人は、こう書いています。

「……私達を取り巻く情況は、戦前に優るとも劣らぬファシズムの情況を呈している。……七十
年安保を登りつめていった闘いも、混迷状態に至っている現在、原理から検討しなければならぬ
時期に差しかかっている。」

これはまったく正当なA・Hの位置付けだったと思われれます。

マスコミの氾濫で眼を遮られ、自分の生きる姿を見極めることが極度に困難になってきている現在、根本的な形を見る姿勢を保たぬ限り、知らぬ内にファシズムへ歩かされていた、ということにもなりかねません。社会のみならず、それを構成している人間自身の多様性に直面した時、認識するということの意味、また思想ということの意味が曖昧になってしまっているという状況があると思うのです。

第一回のA・H実行委は、それを前提としながら、現在の教育制度という一断面を露わにして見せてくれたのですが、学生の運動としては、六十年代の形をもっていたがゆえに壁に突き当たり、実行委は第二回のA・Hへと進むことはできなかったのです。

我々はその地点からの出発でした。あくまでも、人間は歴史を創りながら生きるものだと思うれます。現在の我々を形成している条件の多くは、過去、人間が自分の持つ条件から生み出して来たものでしょう。人間存在を見つめることを通し、条件として持っている多様性を引き受けながら、「動く」可能性を探そうと思うのです。

インフレ等、社会不安が増している現在、ファシズムへの動きは、二年前よりもさらに強まっていると思います。

動きの契機となるのは、生活次元での疎外なのでしようが、動きの原動力は、我々が形成されたこの時代の精神的風土と肉体との間での関係性だと思われれます。精神史という歴史認識の新しい形

は、そのような人間観の上に建てられており、民俗学と共に着実に定着しつつあります。

何かを知りたい、勉強したいという興味は、最終的には、人間とは何か、私とは一体何なのか、という根本的問にまで遡ってゆくものだとはいえますが、精神史はその過程でひとつの足場を与えてくれるものだと考えております。

講演の話に移ります。井出氏はユーモラスな調子の、ゆっくりと、大きな流れを感じさせないほど細やかな印象を我々に与えながら話されましたが、テープを起こしてみる時に初めて、はつきりとしたストーリーができていることに気付いて驚いたものです。

森山氏は時々口吻を荒げ、大きな身振りで笑いを誘いながらの話でしたが、氏の洞察による問題提起は最もラディカルで、それが氏の体験によるものであることがすぐに察せられましたから、こちらにとっては、コンプレックスを抱いてしまうほどのショックでした。

長時間、我々の興味をそらさずに話されたのが色川氏で、会場にあてられた礼拝堂は、熱気というよりは緊張した空気が満ちていました。氏のイロニーニッシュな言葉につられる笑いで、時々その空気は緩みはしたものの、講演が終わるまで聴衆と氏との間の緊迫した関係はずっと続きました。

秩父事件と我々との隔たりは、同じ風土で育っているということからも、また、たかだか一世紀ばかりの年月しか経っていないということからも、極く近いものだと思いますし、事件のあらまし

を聞いたとき起こる感情のゆらぎも、そのことを物語っていると違います。だとすれば、見かけ上の隔たりは何によつてつくられ、さらに秩父事件と現在の我々の間に、どのような関係があるのか、そしてそれは人間存在に対してどのような意味を持っているのか、という問いが、今回の企画で我が直接的に提起したものです。しかしながら、提起した問題が深く重々しいものであればあるほど、言葉のもつ「有限性」が非力なる私自身の桎梏となつてしまふようです。私の抱え込んでしまった諸々の問題を充分に披瀝しえないもどかしさを、今、一応それらに責任を転嫁することで、ひとまず「あとがき」の筆を擱きたいと思ひます。

読者の峭直なる御意見と御批判を拝受いたしたいと思ひます。

木元道郎

暴徒—現代と秩父事件—

一九七六年六月十八日 初版発行

編者 同志社大学労学アッセンブリー委員会
代表者 野呂健一

大阪府寝屋川市桜木町十二番十一号
TEL(〇七二〇)二八一六五〇二
発行者 同志社大学アッセンブリ出版会
(略称A・H出版会)

京都市上京区烏丸上立売西入ル
学生会館別館アッセンブリBOX内
TEL(〇七五)二二二一—一四八三

装画 戸井昌造
装帧 中村宗仁

発売元 京都市伏見区小栗栖西団地元一五八

K&K・K出版行路社

〒610-0111 京都市伏見区小栗栖西団地元一五八

井出孫六(いで・まごろく)

1931年長野県に生まれる 1955年東京大学文学部仏文科卒業
1969年中央公論社退社 『アトラス伝説』で第72回直木賞受賞
(主著)『秩父困民党群像』(新人物往来社)『アトラス伝説』(冬樹社)
『峠の魔道』(二月社)

森山軍治郎(もりやま・ぐんじろう)

1941年北海道美瑛市に生まれる 1965年北海道大学文学部史学科卒業
現在専修大学北海道短期大学助教授
(主著)『民衆精神史の群像—北の底辺から—』(北海道大学図書出版会)

色川大吉(いろかわ・だいきち)

1925年千葉県に生まれる 1948年学徒出陣を経て、東京大学文学部国史学科卒業
現在東京経済大学教授
(主著)『新編・明治精神史』(中央公論社)『歴史家の嘘と夢』(朝日新聞社)『ある昭和史—自分史の試み—』(中央公論社)